

新唐書に就て

岡崎 文夫

唐が支那歷代を通じての輝やかしい時代であり、支那人の最誇とする時代であることは今更言ふまでもない。而して其一半の理由は唐の歴史が最も完備してゐたといふことに於て見出されると思ふ。唐には史職の制度具はり、實錄や時政記が編纂され、それが土臺となつて國史が編まれるといふ順序であつた。この國史が褒貶の意味を有つといふ限りに於いて、これは唐の王室によつて現はされる道徳の標準を具現したものであつた。唐室の衰微と共に史官の制も亦衰へて唐末の國史は編纂が絶え且國史の類の散逸するものも多かつた。やがて五代の時代に入ると北方朝廷では、唐の記録を蒐めて舊唐書を編纂したのであるが、ついで宋が天下を統一すると、唐の記録が又だん／＼と現はれてきて自然唐代の歴史を研究することが熱心に行はれ出したのである。この研究の資料となつたものを單に目錄だけによつて考へると大體事實を記述集成したものと、治亂興亡の跡を尋ねんとしたものとの二類に區別される。而してこの唐史研究熱が自然に朝廷にも及び、宋の仁宗の始めには、唐の歴史を聞いて帝王の參考に資することが屢々あつた。要之、宋に於て新らしい唐書を作るといふ空氣が自然に具

はつてゐたわけである。

新唐書を上る表文は名義上は曾公亮の作であるが宋文鑑には歐陽脩の作となつてゐる。其表文を上つた日付けは嘉祐五年（一〇六〇年）六月で、編纂者等を牘ふ勅は翌七月に出てゐる。この詔勅や上表文によりて新唐書の編纂に費やした年月は凡そ十七年に亙るものであることを知るが、之を嘉祐五年から遡つて計算すれば慶曆四年が新唐書編纂の企てられた年となる。然し之に就ては記録の上で相違する點がある。之を調停して考ふれば次の如くなるであらう。即ち慶曆四年に宰相賈昌朝が已に集つてゐる唐の記録によつて舊唐書の列傳などの補整を試みて先づ新唐書纂修の最初の歩をきつた。翌慶曆五年に刊修唐書の職が置かれたのであつて官制上から見て、慶曆五年が新唐書編纂開始の年である。哲宗の紹聖元年に吳縝が新唐書糾謬を作つて新唐書の誤謬を攻撃した。此書は南宋の始め湖州で刊行された。其折序文を書いた吳元が新唐書の杜撰な理由八ヶ條を擧げてゐるが、その中の主なる二ヶ條に、新唐書編纂の始めに責任者が無かつたといふことゝ完成豫定の期日が興へられてゐなかつたといふことゝを擧げてゐる。官制上から言へば唐書の纂修には、時の宰相が總裁に、その下に刊修と編修とが置かれてゐたのである。尤も功があつたのは編纂官であるが、その編纂官にも屢々出入があるから期限を決めることも六ヶ敷しく又仕事が分化してゐるからそのために實質的な責任ある専任官がなかつたことも亦責任を取る可きものが明白でなかつたことも事實ではある。その中には邵必の如

く、責任を負ふことが出来ないからとて編纂を辭退したのもある。又歐陽脩の如く唐史編纂の事以外に兼職を有つ人が多かつたことなども編纂上の弊害であつたと認められる。然し其爲めに編纂官は凡て怠つてゐたと定めるのも亦當らない。

新唐書は本紀と志表は歐陽脩が、列傳は宋祁が書いたと言はれる。然るに四庫提要では歐陽脩を出さず、呂夏卿と宋祁との合作であるとして居る。啓夏卿は宋史列傳によれば、世系諸表を作つたりなどして新唐書の作製には最も苦心したと言はれてゐる。宋祁も始終列傳に力を注いだとある。之等は提要説の基く所であらう。然しこの説は恐らく取るに足るまい。宋人の書いたもの、中に本紀と列傳との間に食ひ違ひがあることを指摘したものがあつたので天子は歐陽脩に命じて列傳を再修せしめようとしたが、歐陽脩は之を辭退した。それは宋が歐の先輩でもあり、又宋は史家として、一見を樹てた人であつたからだとのことが傳へられてゐる。故に先づは歐、宋の二人が新唐書の編纂主任であつたと見られよう。呂夏卿の新唐書凡例なるものが今日残つてゐてこれを見ると、本紀、列傳、志、表の全體に互り大義のあるところを明記してゐる。それによると本紀、列傳、志、表の間には一部共通した方法のあることが認められる。然し實際編纂の事情から考へ又は其内容から考へ本紀、列傳などの間に緊密な統一があるとは云ひ得ない。畢竟新唐書は歐宋合作の書であると考へて差支ないと思ふ。

呂夏卿は講學に達した人で唐書世系の纂修などには與つて力あらう。宋敏求も新唐書には力を盡

した人である。慶曆五年最初の編纂官が任命されたときから宋敏求の名は見えてゐる。慶曆六年には、續唐錄なるものを作つてゐるし、又通志の中に、唐の宣宗より哀宗に至る五帝の實録を作つたとあり蓋し唐の故實を蒐めるのに力があつた。王疇は又制度のことに詳しく、唐書の編纂に携はつて禮儀志から兵志を分つたが、このことは新唐書に於て始めて見るところである。以上呂夏卿、宋敏求王疇などは終始して唐書の編纂に携はつた人々で、歐陽脩が監修として加はつたのは着手後の十一年目位のことである。歐陽脩が加はつて後に更に劉義叟、梅聖俞なども入つた。劉は天文、五行の志を書いた。歐が監修官になつたについては裏面の事情もあるがそこまでは穿鑿する必要がなからう。

以上で大體新唐書編纂の事情を述べたが、然らばその編纂の趣旨は如何あつたか。上表文によると唐の治亂興亡のあと、唐の典章制度の美は、唐の史料に充分現はされてゐるに拘はらず、舊唐書には一向かゝる美點を發見し難い。舊唐書には何等の編纂標準なく、無闇に些末のことを記したかと思へば又大事のことを逸脱し、文章は徒らに形式を追つて實が無い。須らくかゝる書は改めて新書を作る必要がある。新唐書の特色は文章簡勁に、事實を多くし、舊唐書に無い篇目を新たに立て、列傳を増損し、又義例を正しくしたことにあると。義例を正しくするとは、王の死や又謀叛等に對する用字を明確にすることである。この上表に對して、詔勅は義例以外のことを繰返しはめてゐるが、何故か肝心の義例の點には言及するものがない。然し兎も角、新唐書編纂の眼目は、故事の整理、義例の樹立に

あり、而して只管、文章によつて此兩者を綜合して現はさんことを期したものである。然し實際は本紀列傳の内に食ひ違ひなどがあり、新唐書を以て一代の名作とするわけには行かないと思ふ。然らばとて又一概に貶すことも出来ないであつて、それには又列傳と本紀とを別に見てみる必要がある。

呂夏卿の凡例によると特に注意すべきは、先づ編纂の順序である。新唐書列傳では、后妃を一番最初に置くが、これは尊の義を現はすものである。次に宗室諸王を置いて親の義を、次に隋の末期に亂立した國を詳述して唐の受命の始めの義を示してゐる。次に一般列傳を置いて總の義を、次に四夷列傳を置いて王化の及ぶ義を、最後に逆臣傳を置いて、之は成敗の歸の義を現はしてゐる。今錢大昕の廿二史考異により、新唐書が如何に舊唐書よりその列傳の數を増して居るか又は舊唐書に於いて群傳例へば良吏文苑傳に入れたものを、新唐書では之を本傳に入れてゐる等を知り得る。つまり新唐書が列傳の數を増したと云ふこと以外に箇人を批判して之を列傳の如何なる類型に入るべきかに就て深い注意が拂はれたのである。この様な點のみからでも新唐書は研究される價値がある。

之を更に事實と義例との點から考へると、新唐書の非難されるのは、常にこの事實といふ點で、それは小説の如きものを資料としたりしてゐるといふ點にある。つまり信用し得べからざるものを取つてゐるといふのであつて、吳縝などは最もこの點を攻めて居り次で錢大昕の「考異」趙紹祖の「互證」にその點が深く研究されて居る。然しこの欠點だけを以て新唐書を批難するのは當らぬ。若し事實と義

例とは綜合せられて文章を以て現はされたときには、新唐書列傳など巧みなものがある。その一二例をあげると、藩鎮傳叙の文は主として杜牧の風を帯び、段秀實の傳は柳子厚の書いたものによつて作られ、又張巡、許遠傳は夫々韓愈、李絳のものによつて書かれてゐるのである。かういふ所を見ると傳が宋祁の影響を受けた點が分明である。私の考へでは唐の元和頃の一般學者の主張中には、一種國粹主義の流れがあつたと思はれるが、之が五代に一時中絶し、宋になつて再び現はれて強い影響を齎らした。宋祁は恐らくこの派の學者であつたらうと思ふ。宋祁は徒らに形式の美を追ひ内容の無き詔勅などを一般に削つてゐるが、この考へは列傳の處々に現はれてゐると認められる。

然らば次に歐陽脩の主纂と言はれる本紀と志とは如何あらうか。十七史商榷には、新唐書の本紀は見るにたへないと云つてゐるが、その理由とする所を記してゐない。然しこの本紀に就いては、宋代から既に非難があつた。歐は春秋の筆法で義例を八ヶ釜敷く言ふが、事實を疎そかにしてゐるといふのである。實際、吾々にも本紀は簡に過ぎる感があるが然し含んでゐる事實の項數は必ずしも舊唐書より少いわけではない。然らば歐は何故特にかゝる表現法を採つたかである。新唐書の高祖(李淵)本紀は文として非常に立派で、讀んで面白いが、これを舊唐書や通鑑、又溫大雅の大唐創業起居注など、比較して讀んで見て、第一に唐に義兵を起したものは誰であるか又義兵を起すとは如何なることを注目して見る。溫大雅の起居注によると起義は李淵の意から出てゐるが、且李淵は隋を亡す

意はないとある。隋末に兵を起した李密は隋の十大悪を攻め隋を生民の敵必ず滅すべしとして居るが起居注に見ゆる李淵はむしろ隋を守り立て、自らはその禪を受けるを旨として居る。所が新唐書によると、兵を挙げたものは、太宗李世民であるとしてゐる。舊唐書には李世民が父に勸めて舉兵したとあつて、些さか穩和になつてゐる。つまり新唐書では、この間の意を極めて明瞭にしてゐるのである。太宗本紀には李淵の言葉として兵を挙げたのは汝である、吾は汝に従はんと記してゐる起義の舉は全く太宗から出たと認め、而して新唐書では唐が兵を起したときの、天下亂離の状態を明白に書いてゐる、そこで太宗の起兵は天下萬民のためにしたと見、隋の帝室を守り立てる意は認めないわけである。これは溫大雅の意見とは違つてゐる。舊唐書では、この間のことを如何に解釋したか極めて不明瞭である。たゞ劉文靜の傳に李世民的活動を述べてゐるので、之を平心に讀めば、少年英氣の李世民を地方に流寓して天下の變を見て居る一機略の士が唆かして大事を挙げたと解せられるが李淵が之を如何に處理したか李世民が眞に主働者であつたか全く分らない。かゝる點を新唐書は非常に明白にしてゐるのであつて、要之するに新唐書は明らかに李淵は傍役で李世民が主役であるとしてゐる。新唐書は材料として起居注を採り、これを一流の史觀を以て書いたものと認められる。普通支那の學者は舊唐書は唐の國史から採つたとしてゐる。證據はないが、長慶以前に於てはそのことはまづ有り得ることである。唐の國史は起居注とは已に異つた立場で書かれたことを推察するに難くなく餘程

改作されて凡ての事情が漠然としてゐる。通鑑は非常に多くの材料を探り、立場を異にしたものをも容れて巧みに調和してゐるが、然し史觀の流れといふものは、なかく明瞭でない。兎も角或る事實に對する解釋乃至史觀といふことになる、新唐書の書き方は非常に筋が通つてゐる。かく新唐書は唐の帝國の創立者を太宗李世民であると明瞭に定めた。その意味は高祖太宗の兩紀の讚によつて最も明かである。高祖の讚には李淵の功業につき何の觸るゝ所もなく、たゞ唐の起るべき運命の一般的叙述のある計である。而して太宗の讚に於て唐の制度文物の美が成立つたと解する。茲に唐の王室が道德的標準を示すと云ふ意味が確立する。然しかゝる新唐書の觀方が果して史實を客觀的に正確に捉へ得るか、どうかは別問題である。

新唐書本紀の凡例はやはり呂夏卿が書いてゐる。今其點を別として新舊兩本紀の異同を考へると、新唐書は主として國體に關する事國交と忠義と叛臣との記述を專にして居る、之恐らく歐陽修の春秋に對して抱く一見解によつて書かれたものであらう。歐陽脩は經を以て經を理解するといふ方法を取る。故に春秋の直筆を主張する。これ勿論歐陽修の主觀的なものであるが、この主觀のために新唐書が舊唐書に劣るとは云はれない。舊唐書の長慶以前の分は出來が悪いと云はれて居る。この部分の本紀について考ふに其事實に於ても詔に於ても通鑑の採用しないものが多い。之は恐らく通鑑の選擇の結果削除したと見るべく、材料が多いと云ふ理由で舊唐書を推賞してはならない。事實詔勅の如きも

その當時に實行せられたとは考へられず而も衰頽時代にあつて朝廷を中心として書くとなれば些細な天子の私生活などが、長々と書かれてゐるは止むを得ぬ。かういふ詔勅類や天子の私生活の記事などは國家的歴史の立場から見れば、削つてしまつて一向差支へないわけである。この様な點から見ても新唐書の方が舊唐書よりも、より多く客觀的なものを有つてゐる。其歴史の理解の仕方にしても例へば、宣宗の世を以て、舊唐書は、宣宗愛民の情の故に天下は平和であつたとしてゐるが、新唐書の方では、唐の天下は宣宗の時から衰へ始めたとしてゐる。言ふまでもなくこれは歐の客觀的な見方が正しい。

次に志のことであるが、これに就いても呂夏卿の凡例がある。それ以外新唐書の禮樂志、五行志は非常に特色があるとされる。それは如何なる意かといふ古代の禮樂は基く所がある、後世の禮樂は名である、禮は人情の自然によつて成るものが正しい、この正しいと見られるものだけを唐代から抜いて、叙述したものが新唐書の禮樂志であるとされる。五行志は從來附會された諸學説を省き純粹の儒説のみを擧げる。つまり採る可きものに價值の差をつけ、萬世の標準となる可き様なものだけを採るとする。然し新唐書が最も唐代の特長を理解せしめるものは、その選舉志、兵志、儀衛志である。この三志は新唐書に於いて始めて設けられたものである。尤も三志の中で選舉志は杜佑の通典から來るものと解せらるゝが、然し兵と儀衛とはその内容全く通典のそれとは異つたものである。この兵志儀衛

志は王疇の作といふ説と、歐陽脩の作といふ説と二つの説があるが、真相は兩者の合同に成るものとされよう。儀衛志は實に新唐書の特色を示すものである。儀衛は唐の王室の特長であつたが、かゝる志を立つることは唐の王室を理解するのに面白い試みである。儀仗兵は全國の農民から選び、更に農民は均田法によつて生活を保證されてゐるので、結局王室は一般國民に守られてゐるといふことになる。新舊唐書の食貨志を比較するに、均田法の理解に對しても兩者の區別は明瞭である。舊唐書によつたのではこの均田法の立派なものであることは分らない。又府兵制度の崩壞は通鑑には開元十年のこととしてをり舊唐書と同じであるが、所が通鑑にはこのことを書いた最後に、舊唐書には見えないう「兵農之分從之始矣」といふ字句が足されてある。この考へは新唐書から通鑑に導入されたものと解される。新唐書の理解の仕方については、已に王應麟の玉海にも言つてゐる通り、異説が多く、私としても勿論、主觀的獨斷的なものと思ふのであるが、兎も角、新唐書の考へ方が強く後世を支配して居ること事實である。宋一代の歴史思想の流れは、又この間にも窺へるわけである。國家といふものを明瞭にしようといふ考へ方は宋代に出來たものである。この考へ方の源は勿論唐代に溯り得るものではあるが。歐陽脩は、かゝる時代の考へ方を明確に具現してゐる人である。つまり仁宗の頃から已にこの考へ方の現はれたことを見るものである。後の朱子の通鑑綱目は、勿論國家意識を明瞭にしたものであるが、この萌芽は已に新唐書に於て見られると考へるものである。